



## ジャパニーズ・ドリーム : 他者の発見と再発見

フレンツュ, ロディカ

---

**(Citation)**

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 63:41-56

**(Issue Date)**

2025-03

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/0100494067>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100494067>



# ジャパニーズ・ドリーム —— 他者の発見と再発見

ロディカ・フレンツユ

(Rodica Prentiu)

西田茜秋先生へ

さまざまの事おもひ出す桜かな

松尾芭蕉

エキゾチック。神秘的。魅力的。これらは、もう二十年以上前のことになるが、日本文化との邂逅以前に、私の頭の中に浮かんでいた日本のイメージであった。そして今では、さまざまの研究奨学金による数次・数年にわたる日本での生活経験を経て、私は日本の印象を桜や風鈴、俳句や書などを通して表現するようになった。

外国語の勉強を始めるということは、ある意味で、生まれ変わることに、自分自身にとってのあらたな「再生」を意味する。それはたとえば、「第二の児童期」をやり直すこと、言い換えれば第二の子供時代を再び生きているということと同じである。若い頃に他国と触れあうと、多くの場合最初にカルチャーショックに襲われ、その後続いて言語ショックが生起される。カルチャーショックは恐怖や不快感をもよおさせるばかりでなく、異文化に近づき理解しようとする



### 富士山との初めての出会い

化へのイニシエーション、また自分自身の変化をそれによって命名したいからである。私の「ジャパニーズ・ドリーム」は二十年以上前からのことである。私は一九九七年に、在ルーマニアの日本大使館からの推薦によって、専任の言語

ることを妨げようとする。しかし、ある時期を克服すると、やがてそれは新たな感情の創出とともにさらなる思考への挑戦という形になって自分の前にあらわれてくる。個人的な体験による異文化との出会いが、「観光旅行」を意味するものになるか、あるいは「精神的な旅」を意味するものになるかの選択肢は、実は、私たち一人ひとりの手の中にある。私にとっては、日本との出会いが、今ではまさに運命的チャンスのように思えるが、それによって自分の人生の軌道が変わったと言っても過言ではない。新しい言語や衣服だけでなく、まったく新しい書き方と読み方(右から左へという縦書き)、それらは新しい精神生活、「一期一会」という新文化への冒険の道を開いたのである。

### (私の)「ジャパニーズ・ドリーム」に関して

「アメリカン・ドリーム」とは、あらゆる可能性を秘める国への、物質的な豊かさを求めるための(多かれ少なかれ冒険的な)旅だと言われる。私は「アメリカン・ドリーム」をモデルにしながらい、形象・表現のレベルで、「ジャパニーズ・ドリーム」という言葉を使用しようと思っている。これは、自分自身の経験による日本人



お正月に八幡神社においてホストファミリーの安積美和子様撮影してくださった和服の写真  
一九九八年

学者として教育・研究に従事しているバベシュ・ボヤイ国立大学から臨時休暇をもらい、日本の国費奨学生として国立神戸大学留学生センターにおいて初級日本語の勉強に第一歩を踏み出した。日本の文部科学省からの奨学金は私の「ジャパニーズ・ドリームライブ」のきっかけとなったが、それは新しい人生のライブ・シリーズの最初のエピソードに過ぎない。日本との出会いができたことは、感激の極みであり、私の人生にあつてまさに至福の時であった。今は、この「ジャパニーズ・ドリームライブ」は、それを心の中に抱いて以来、人生の半分以上の時を経たが、今なお大空を飛び回る鳥のように、そしてときにはマグマを噴出する火山のように、エネルギーシユな情熱としてあり続けている。実は、日本とのこの運命的邂逅は、私の予想以上に、驚嘆すべき素敵な経験を私に与えてくれた。その時の記憶が次々によみがえってくる。それをこれから以下に順を追って紹介したいと思う。

振り返ってみると、日本での留学の日々は、私にとってまさに感激、感動の連続であった。そうしたなかで、最も心に残るものはないかと問われれば、私はそれは「俳句及び書道との出会いだ」と迷うことなく答えるだろう。これはもう大分前のことなので、もはや「ちかごろ」のことではないが、私にとつてはまるで昨日の出来事のように頭の中に鮮烈に浮かんでくる。ここからはその

時の「ジャパニーズ・ドリームライブ」の物語を踏まえて叙述できればと思う。

実は、神戸大学留学生センターにおいて日本語を学んで半年が経とうとしていた頃、私は日本の伝統的な文化に興味を持ち、ある日、伊藤智博先生に、「教科書で提供される情報を超えて伝統文化の特色、例えば俳句等を教えていただけないでしょうか、実例を挙げて」とお願いをしたことがある。翌週、授業の最後の五分間に、予告もなく、先生はおもむろに白板に横書きで「海に出てこがらし帰るところなし」という文を書いてくださったのである。音節を数えてみると俳句かもしれないと気づきながら、ひらがなで書かれた「こがらし」の意味が分からない私に、先生は漢字で「木枯らし」と書いて意味を教えてくださいました。これが私と俳句との最初の出会いであった。この句を見るや否や激しい感情に圧倒され、その瞬間、私の胸はキュンと痛くなつて、感動のあまり知らず識らずのうちに涙がポロポロ出てしまったのである。その涙は止まることなく、昼休みの間までも続いた。

心の中で、発見したその言葉の意味が、俳句の中でひそやかに共鳴していたのである。響きあつていたと言うべきであろうか。心が突然覚醒したかのようなその時の鮮烈な印象を、現在もはつきりと覚えている。今日の目でそのころの記憶を振り返ると、先生にご迷惑をかけたに違いないと思う。私のそのときの涙は、先生と級友たちが思っていたような、ホームシックなどと関連する涙でなかったことは間違いない。言葉によつて引き起こされる感動を分析することはたやすいことではないが、俳句という言葉の連鎖によつてもたらされる感動こそ、「俳句」の俳句たるゆえんだらうと私は思う。

私は西洋文化の中で生まれ育った人間なので、そうした西洋の文学的背景のもとに考えると、特に詩の鑑賞の場合は、詩のもつ意味が、韻文を読みつつ雪だるま式に膨れ上がつてくると言つてもよいと思われる。西洋的な詩を黙読しても、唱えても、最初から最後まで通読しないと、意味を深く理解すること、その深奥を味わうことがなかなかできないわけである。

これに対して、俳句の場合は、意味を理解するのに、西洋の詩のように時間を要しない。それは、俳句は十七音の

みで構成される上に、表意文字である漢字は、絵のようにその意味を表したりすることが可能であるために、目からでも理解しやすいためだと考えられる。一口に詩（韻文）といっても生まれ育った文化的環境によって、それを楽しむありようは一樣ではないことが注意されよう。

「海に出て木枯らし帰るところなし」という俳句は、私にとつては異文化的所産であるにもかかわらず、文化的環境という色々な相違点を越えて、アリストテレスの「カタルシス」という基本的芸術概念の意味を教えてくださいましたものであった。

「カタルシス」というのは心のへもやゝをすつきりさせる、あるいは純粹な感情のことであるが、これは西洋の詩と日本の俳句との間にある共通点であるとはつきり私には自覚できたのである。ホームシックや個人的な思いによる悲しみではなく、文学的世界の中で、俳句の体験として、俳句は特殊な位置を占めているということが、その時、私なりに分つたように思われた。「ジャパニーズ・ドリーム」の中で、私は俳句の助けを借りて、日本文化モデルを自分なりに理解する旅をはじめていた。最も短い詩形式の宇宙への扉を開いた俳人の名前が山口誓子（一九〇一—一九九四）であることをほとんど知ることとなった。また、かなり後のことであるが、俳人山口誓子は前世紀後半の俳句の復活に重要な役割を果たしたとして日本芸術院賞を受賞していたことを知った。一九九三年に出版された『The Essence of Modern Haiku. 300 Poems by Seishi Yamaguchi』の中の山口誓子の個人的な注釈によつて、この俳句が一九四四年に作られたものであることを知るに至つて、この俳句は表面的な字句の意味を超えて、第二次世界大戦時に日本軍が行つた悲劇的な戦術である「神風」の犠牲者への追悼の意が込められているのかもしれないという思いを得た。日本語初・中級を学んでいたそのころの私には、太平洋戦争にまつわる時代背景が山口誓子のこの俳句にあつたことなど全然気がつかなかつたので、私にはただカタルシスそのものを感じたに過ぎなかつたのである。これはしかし、今でも同じかもしれない。山口誓子の俳句の言葉はひしひしと私の胸に共鳴してくるのである。

山口誓子の俳句は、悲しみ、繊細さ、夢見心地といった特定の状態を通して宇宙を感情に変え、その感情を読者に

山口誓子の「海に出て木枯らし帰るところなし」

伝える、魅力的な日本の詩の世界に私を導いてくれた。語彙数も十七音という制約を受けるが、そこでは叫びやしぐさが物語に取って代わり、感情が概念や知性の産物になることを拒否し、存在や死等の究極の瞬間を思い起こさせる。「純粋な詩の真髄」または「言葉による絵画」とも呼ばれて、俳句は極限まで表現を切り詰めることによって、恵みの瞬間に経験される極まった感情について語り、とりわけ、語られない言葉や沈黙に声を与える……。私はその時、山口誓子の俳句を純粋に直感的に理解したのである。そして、俳句と日本の書道との出会いは、私にとってはおよそ同時のことなので、はじめての俳句との出会いの記憶の謎を留めるためにその思いを手筆をとって、色紙に書いてみた。



私は、書道も俳句も、人を人たらしめる芸術だと考えている。俳句には書道と同じように、その息吹が立体的であることと、その裏にはしつかりとした物語が形成されていることなどが、俳句と書道との共通点だと思う。俳人正岡子規が説いたように、写生を通して、ただ見たものをそのまま描くことなく、人の心の目や感性を存分に活用して、物語性を打ち出すのである。

「ジャパニーズ・ドリーム」の別のページのことを記したい。松山市立子規記念博物館を訪問した折は、ちょうど子規の命日の三日前であった。その時に、博物館よりいただいた子規の俳句集のうちに、「木枯らしや我に向いて波立ち上がる」という俳句があった。私にとつては、今でも、山口誓子のあの俳句は子規の俳句の反響のように聞こえる。それは俳句の世界において私なりの独自の小さな「発見」であった。俳句の意義はその短さに凝縮されるがゆえに、読者がそれのみずみずしい感性に驚いたり、感じ入ったりすることができる。また、季節の移り変わりにつれ、俳句には装飾的なシンプリシティというものが存在する。更に言えば、一瞬にして、美と同居する快感をそこに感じさせるものがあると言えよう。思い出とともにそれを通じて、俳句のもつ美意識と改めて触れ合うことができたのは望外の喜びであった。瞬く間に、そしてつかの間の夢のように、俳句というツールは異文化の壁を乗り越えてしまう。俳句のもつこうした魅力的な特色を共有することによって、いつの折りにか国境を越えて相互理解ができる日が来ることであろう。それは決して夢ではないと私には思われる。

「ジャパニーズ・ドリーム」の思い出の中で、一生忘れられない思い出はなんとと言っても書道との出会いである。実は、日本語を勉強し始めたばかりの頃、一番驚いたのが日本語の文字のありようであった。日本語には書くシステムが三つあり、当然のことながら私はこの複雑な日本語の書記様式に関する様々な疑問に襲われたのである。このような書き方はどのようにして生まれたのだろうか。自然や周囲の世界とどのような関係があるのだろうか。遠く離れた異国の文化で生まれ育った私が、どこかで、より深いレベルでそれを理解できるだろうか。こうした日本語への驚きと知的関心の増幅は、私を日本文化を内面から探求する道へと誘った。まずは「仮名や漢字等がよく分かるために

は、何をしたらよいのだろうか」と考えながら、「やはり習字を習おう」と決心し、神戸学生青年センターで習字を習いはじめたのである。最初の習字教室でのことを思い返すと、「あなた、本当に習字をやったことがないんですか？」という先生のクラスでの質問が脳裏をよぎる。書いたばかりの「海」という漢字の最初の作品を少し驚きながら私は見ていた。海が好きだと独り言を呟いて、砂の上に文字を書いているのを想像していた。(クラスはちょうど春休み直後であった。フィリピンのクラスメートに誘われて、春休みをフィリピンで過ごし、太平洋のエメラルドの色に心を奪われたまま日本に戻ったので、そのときの印象と感情をもって書いた作品であった。)私は先生に、クラスの初めころに体の位置と手の位置を教わったことを思い出した。「海」の文字、筆、紙、墨の線等々、こうしてすべてが始まった。そして後に、新しく漢字の名前で彫られた自分専用の印鑑を授かることになるのであった。

学年度末の卒業式の際、私の留学していた神戸大学国際文化学研究所から、留学生一同を代表して感謝の言葉を述べるよう依頼されたのである。私は特別な出会いをはじめとして、習字の筆についても触れて感謝のスピーチを終え、そして書としての「海」の作品を披露した。それからおよそ一週間後、私のスピーチが人々に深い印象を与えたことを実感できることが起こった。ノーベル医学賞候補者の西塚泰美(一九三二—二〇〇四)神戸大学学長(当時)から、「路貞香」という名前——習字の先生に初めてのクラスの際、漢字で作ってもらった名前——を刻んだ翡翠の印鑑を頂いたのである。私の帰国した後も、西塚先生は四つの色々な書体で作成した印鑑を彫って送ってくださった。私が書道の道を歩むには、その伝統を尊重して、自分の作品に署名するための印鑑が必要であったから、それは何よりの贈り物であった。西塚先生はそつと天国から見守ってくださいているに違いない。先生のご高恩に改めて深謝申し上げます次第である。

ただ一つ趣味といえよのだろうか、私が何より好きなのは字を筆で書くことである。なぜかはわからないが、物心付いてから今に至るまで一貫して書道に魅了されてきたような気がする。手に筆をとって書くのであれ、頭の中で書くのであれ、それが墨の文字の世界でありさえすればよいのである。なぜ自分が書道にこれほどまでに心を惹か

れるのか、それをまわりの人々に筋道立てて説明することはとても難しい。最初から習字のとりことなった私は、国に戻ってから日本語の学習と同じように、独学で、書の稽古を続けていた。それにつれて、習字を通して日本語・日本文化に関する知識も深まっていった。言葉で表すのはすこしもどかしいところがあるが、書道の稽古時にはいつも、子供の時の絵の授業が思い浮かぶ。そこではいつもゆつくりとした気ままな楽しい時間が流れている。休むことなく、大変忙しい生活に追われる日々が続いていても、筆を手にとると時間をすっかり忘れてしまう。私にとって書道とは本当の自分と静かに向き合う時間を与えてくれるものなのである。黒い文字の世界が白の紙へと進み、果てしない美の追求へと突き進むことに私の心は奪われるのである。その感激といったら筆舌に尽くし難い。誠に書道とは、筆と墨で無心に自分の心の鏡を描くようなものである。無心の境地に身を置かなければ心の鏡は描くことができない。私はいつもそのことを念頭に置いて筆をとっている。

西洋文化の人々にとっては、カリグラフィは直接に「美しい文字」を連想させる言葉である。「美しい」という言葉は、まず「注意深く、きちんとしていて、均整が取れていて、清潔である」こと、そして「美的」を意味する。ところが、日本語を勉強しはじめた頃、日本語には実際は西洋の「カリグラフィ」を表す単語が二つあることが分かった。「習字」と「書道」という単語である。習字とは「文字の練習」のことであるが、書道は芸術としての「書き方」のことになると言えばよいだろうか。つまり、言い換えれば、習字は書道の基礎となり、そして、習字という書く練習は、同じ字を書いたとしても各実践者の筆使いによつて様々な形となつて表れる。まさにそれは書道の筆がもたらす秘密の世界への啓示であり、それはいつしか書道タイプの芸術的探求に変容する可能性を有している。このようにみると習字と書道は表裏一体の関係にあり、日本文化的な表現を用いて言うならば、習字は「藝」の世界、書道は「晴」の世界での実践ということになる。

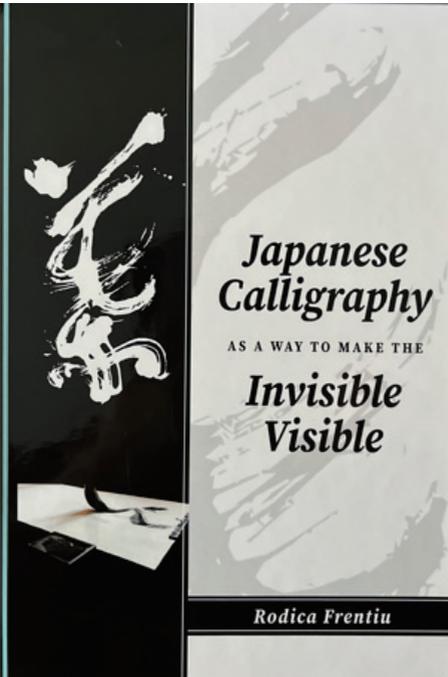
私は知識と実践の両方を必要とする書道の道への入門を続けた。そして、年が経つにつれて、二〇〇六年に、国際交流基金のフェローとして——東京大学の池上嘉彦名誉教授及び昭和女子大学の太田鈴子教授を介して——出会った

昭和女子大学の西田茜秋先生の指導のおかげで、狸の短い毛の筆を、より大きくて馬の長い毛の筆に交換した。そして無意識のうちに、私にとって習字は書道に変わってきた……。

忍耐強くこの道に導いてくれた日本書道の先生方は私に何を教えてくれたのか。力強いこと、筆の動きや繊細さ等への注意のこと、文字の書形をその定型から逸脱させること、筆先の動きのその瞬間を考えること、墨、筆と紙の調和を生み出すこと。つまりは書道そのものの道を教えてくれたのである。それらのことについては、私の著書や日本<sup>四</sup>とルーマニア<sup>五</sup>における自作品展を通じて感受していただきたいと思う。

二〇〇二年九月に、神戸市の兵庫県立美術館で開催された集団展（国際フォーラムの一環）への招待に応えて、私は出展者として日本でデビューした。もしこのスタートが日本でなかったら、おそらく私は書道との出会いを公に告白する勇気を持ってなかつ

瞬間記憶 三

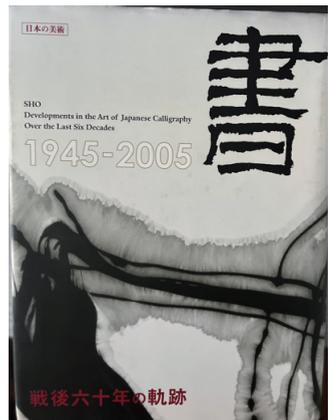


Rodica Frentiu, *Japanese Calligraphy as a Way to Make the Invisible Visible* (Cambridge Scholars Publishing, 2023)

ただろう。これは私の書道人生にあつて忘れられない貴重な経験であつた。長年にわたり、私は日本とルーマニアでも日本の書道の展覧会（個人および集団）を行ったが、そのうちの二つだけを取り上げることとしたい。

一つは、二〇一五年一月に、私は在東京ルーマニア大使館本館において、書道の西田茜秋先生（一九三六―二〇一五）の立会いのもとに、「瞬間記憶」というタイトルで日本の書道の個展を催したことである。

これは客観的な偶然とも言えるのであるが、私は、西田先生に紹介される前に、東京の書店において、現代日本の書道の巨匠の代表作を収録した、約一〇〇〇ページの大冊『書——戦後六十年の軌跡 SHO: Developments in the Art of Japanese Calligraphy over the Last Six Decades 1945-2005』という著書を購入していた。その後、私は本を読みながら、特に気になつた書道の作品のページにすぐにマークを付けておいた。驚いたことに、西田先生に出会つてから数年後、もう一度この本をめくってみると、先生の作品が出ているページに紙のマークが貼つてあつたのである。実際には西田先生とは知り合いになる前にすでに出会つていたのであつた。「ジャパニーズ・ドリーム」の中で、私には著名な書家の西田先生との関係は、やがてかけがえのない師弟関係と



西田茜秋先生と共に  
（在東京ルーマニア大使館本館 二〇一五年）

なった。

そしてもう一つ。二〇一八年十月に、私が住んでいるルーマニアのクルージュ・ナポカ市の「シミオン・バルヌシウ」中央公園にあるカジノ都市文化センターにおいて、「大ルーマニア統一100周年記念に寄せて 松山よりクルージュ・ナポカへ桜100本贈呈」というプロジェクトが実施される際、この非常に特別なイベントの完成を祝う、「桜花」の作品を核とした「筆の思い出」の書道個展を催したことである。

実は「大ルーマニア統一100周年記念に寄せて 松山よりクルージュ・ナポカへ桜100本贈呈」のイベントは、数年間にわたって、在ルーマニア日本大使館をはじめ、愛媛大学や「桜」協会やクルージュ・ナポカ市の様々な機関が見たまさに「夢」の実現であった。それはなかなか叶わぬような夢と思えるほど困難に満ちた挑戦であったが、なによりも嬉しいことに、関係諸氏の皆様のご協力と様々なご尽力のおかげで、手続き等の困難さを克服し、ついにその素晴らしく輝かしい日を迎えられたのであった。

「Think globally and act locally」、すなわち、「グローバル」に考え、「ローカル」に行動するという「グローカル」という言葉で表される現在の時代では、こうした「文化的な背景の借り」のおかげで、漫画やアニメをはじめ、日本茶や寿司等まで世界中に広がっている。クルージュ・ナポカにも日本料理店がい



くつかあるが、素晴らしいことに、二〇一八年より、たくさんの桜の苗が届けられている。ルーマニア人が「桜」という言葉から連想するのは、日本の文化はもとより、自然・環境への愛であり、自然的、創造的な美しさへの尊敬であり、そして国境を超えた平和の象徴である。それはまた日本人の思考方法であるとも思われる。これまではクルージュ・ナポカの人々はテレビや写真で桜は知っていたが、その桜は動かない桜であって、美しく咲いてすぐに散ってしまうはかない桜の姿を知らなかった。しかし、数年前から、クルージュ・ナポカの人々はその美しさもさることながら、その花の命の短さが人の心を捕らえるのだということを、自分自身の目で散る桜を見てはじめて分かるようになったのである。クルージュ・ナポカに植樹された「動く桜」は末永くそれを見る人々の心を打つに違いない。

このプロジェクトはお互いの将来の思い出へのスタートではないだろうかと思う。待ち遠しいことだが、これから春、当地の人々が桜の並木道を散策し、花見を楽しみながら、友好を深めたり、異文化の触れ合いを体験したりして、国際交流にも一役買うことが出来れば幸いであると思う。

二〇一二年に、日本の外務省が「Japan: Fascinating Diversity」と題したビデオ・ドキュメンタリー形式の広報を公表した。五つのビデオクリップを通して、現在の日本のアイデンティティを定義していると思われる、国際社会の目を惹きつけるために、五つのイメージを掲げている。それらは、「おいしい」、「かわいい」、「たくみ」、「おもてなし」と「未来」である。「グローバルイノベーション」の今の世界の中で、日本の桜の贈り物は、二つの文化間の象徴的なコミュニケーションの素材となるのではないだろうか。クルージュ・ナポカの人々は日本の文化を自宅で楽しむことができ、日本人はこれのようにしてルーマニア人の目に作られたイメージの中に自分自身を見る機会を持つことになるだろう。愛媛大学の清水史教授が初めてこのプロジェクトに関してお話くださった際、二つの文化間のコミュニケーションのための新しいレシピにすぐに気づき、先述した概念に「仲よく」という言葉も加えたらよいのではないかと私は考えた。ルーマニアでも実現できる「ジャパニーズ・ドリーム」というものに無我夢中になっている私がそこにはいたのであった。

当然のことながら、このプロジェクトの完成に向けた七年間の協力の間に、ルーマニアと日本の間に「感情的なつながり」が生まれ——実は最近、ルーマニアと日本は外交関係樹立百周年を祝った——その間に私たちはお互いのニーズ、願望、期待を理解することを学んだ。これが簡単なことではなかったのはもちろんのことであるが、しかし、最後には力を合わせて成功に導くことができた！日本の桜の木のほとんどもは新しい環境を生き抜き、春が来るたびに花を見事に咲き誇らせることであろう。

このグローバル化の時代において、一方ではアイデンティティの希薄化、他方では、偏見と差別の深刻化の中で、クルージュ・ナポカの公園では、ルーマニアの鼓動が桜の木を通して日本と同調し、両国の途切れることのない文化習慣として、「花見」が、毎春日常の中にある非凡な美しさを人々に思い起こさせることであろう。そうした自然とのふれあいの人々を親密にし、お互いを最高の喜びの時間を共有する場へと導くのである。歴史の流れの中で、このプロジェクトは世界のクルージュ・ナポカが世界の日本との出会いを常に可能にしているのである。いつの日か私たちの街クルージュ・ナポカが「トランシルバニアの中心部にある日本の桜の街」と呼ばれる日が来たら、それはまことに望外の幸せである。そうしたら私の「ジャパニーズ・ドリーム」も桜の花のように毎年生き返ることだろう。



クルージュ・ナポカ市の桜花、二〇二四年

「トランシルバニアの中心部にある日本の桜の街」と呼ばれる

長年にわたり、「ジャパニーズ・ドリーム」、つまり日本への探求は、私にとっては留まることなく進化し続け、それは単なる情報としてではなく、精神、感情、行動のさまざまな側面において私の魂と深く共鳴するものになっている。直観的な理解と知的な知識を通しての異文化への興味深いアプローチはこれからも続くことと思う。日本は、自分の人生を本に喩えるならば、その本の中に非常に重要なページを占め、しかもそのページは今もなお書き続けられている。日本語、日本文学、日本文化との出会いは、私にとっては新しい子供時代の新たな始まりを意味し、当時の私の未来と今日の現在を再構築した。私は人々のしぐさ、匂いや香りを通して日本を発見し、言語、文学、文化を通して日本を再発見した。それらは私に経験と知識の新たな地平を切り開いたのである。興味と好奇心をもって私はそれに取り組んだが、同時にその新しさを理解し、異なるコミュニケーション方法を深めたいという願望も持ったのであった。

「アメリカン・ドリーム」が、ウエルギリウスの言葉を借りれば、「金への呪われた飢え」(ラテン語では *auri sacra fames*) であるなら、「ジャパニーズ・ドリーム」とは畢竟「本への呪われた飢え」(ラテン語では *libri sacra fames*) ということになるだろうか。「本」は、無限の知

識の海を旅したいという飽くなき欲求を総称する言葉である。そして「本」は、精神的な豊かさを求めて内なる旅をし、他者との関係における自己を発見するために、無限の知識の海を旅したいというたゆまぬ欲求の総称となるだろう



「夢」  
目を開いて書いた作品(右側)と  
目を閉じて書いた作品(左側)

う。私の書の作品の中では、二つの「夢」の作品がある。それらは二〇一五年一月に、在東京ルーマニア大使館本館において、「瞬間記憶」という書道の個展の際展示したものである。一つは目を開いて書いた「夢」の作品で（右側）、もう一つは（文字通り）目を閉じて書いた「夢」の作品（左側）である。

注

- 一 西田茜秋先生に関する詳細は次の通りである。『書——戦後六十年の軌跡 Sho : Developments in the Art of Japanese Calligraphy over the Last Six Decades 1945-2005』（東京、美術年鑑社、二〇〇五年、二〇五ページ）又は『墨・書が楽しくなる雑誌 Sumi : The general guide to Japanese "Sho"』（二〇六号、二〇一〇年、九・十月号、東京、芸術新聞社、二二〇—二二二ページ）
- 二 数か月後に西塚学長が亡くなられたので、深い感謝のしるしとして、私は二〇〇六年に、クルージュ・ナポカの国立美術館で開催した書道個展を捧げた。
- 三 私の作品が二〇一五年に広島で Connect the World, International Japanese Calligraphy Exhibition, Global Shodo @ Yasuda という国際書道展示会の Calligraphic Character Design セクションにおいて、プラチナ賞を受賞した。それは、途切れることのない黒い線を通して——不思議なことに筆先が思いがけず二つ、また三つに分かれ——響きわたる記憶のこだまのように生み出されたその瞬間の記憶を捉えようとしているものでもあるし……。
- 四 「風物語」（国際交流基金、東京、二〇〇七年、個展）、「時空」（国際交流基金の浦和センター、東京、二〇一〇年、個展）等。
- 五 「動き表象・言葉——書道に関して」（国立美術館、クルージュ・ナポカ、二〇〇四年、個展）、「日本の書道——線の変容」（ルーマニア文学館、ブカレスト、二〇〇六年、個展——その際、フロリーナ・イリスという作家が日本での個人的な経験にインスピレーションを得た小説『東の空の五色の雲』を発表したこと）、「筆の黙想」（ルーマニア国民博物館、ブカレスト、二〇一二年、個展——二〇一一年の福島犠牲者へ）等。